

# 柳生新陰流「十兵衛杖」の研究

赤羽根 大介

神奈川県歯科大学助教(体育学)

## 目次

- 一、解説
- 二、『仕込杖遣様目録』〔十兵衛杖〕
- 三、十兵衛杖・春風館の遣い方  
打太刀・下村幸裕  
使太刀・赤羽根大介
- 四、『中村保身仕込杖遣様目録 口伝秘伝書』

### 一、解説

「十兵衛杖」は、柳生十兵衛が柳生の里に籠って兵法研鑽に明け暮れた際、「無刀取り」の工夫の過程で考案されたものといわれている。江戸柳生家では「十兵衛杖」を重んじ、新陰流の極意を得たものであっても、僅かの選ばれた者にしか伝えなかつたという。寛政七年の日付のある伝書〔後述〕にも「右杖は柳生十兵衛様、御工夫にて、殊の外、御秘蔵の事ゆえ、外に知るものなし」とある。

柳生の里・正木坂道場元師範で江戸柳生の研究家である大坪指方は、江戸柳生家は將軍家指南番としての格式をもつて、藩主が登城の折、江

戸城の玄関まで十兵衛杖を携帯することが許されていたと話されている。(鶴山晃瑞『護身杖道』成美堂出版、昭和五十八年)  
また尾張柳生十一代・柳生嚴長の『日本純正兵法ト柳生流』(昭和七年、金剛館発行)には次のようにある。

江戸柳生氏の第二代十兵衛三嚴師は一流兵法剣道の裏として新陰流の古太刀の極意から三尺八寸五分の仕込杖を使う道を工夫発願しました。新陰流仕込杖術がこれであります。

これは新陰流の古太刀九箇之太刀や、天狗抄や、三学円之太刀、その他の極意から抽出したものであるから大にこれを秘伝して、師は大和国柳生谷に隠棲して僅かに数名の高弟に限ってこれを伝えたのであります。

大正四年ごろから老師父(柳生嚴周)と私が時々やまと柳生村の祖廟を参詣して古蹟の保勝方法などに就いて尽心する様になった頃から、この三嚴師考案の新陰流仕込杖術を師の秘伝書によって研究する様になり、江戸柳生氏に於いては幕末僅かに一、二手を伝えるに過ぎなかつたのを我れ等はこの頃から全部の正伝を明らかにすることが出

来て今日これを顕彰して居る次第であります。

この文の最後の「江戸柳生氏に於いては幕末僅かに一、二手を伝えるに過ぎなかった」という殿長の発言は事実ではないであろう。幕藩体制下では家業の柳生新陰流を受け継いでいくことが柳生藩の存在理由であり、柳生藩で特に重んじていた十兵衛杖を失伝することはありえないことである。

一万石の大名であった江戸柳生家の本領は奈良の柳生であったが、將軍家の兵法指南役であったために、柳生藩は参勤交代なしの、江戸に常駐する「定府」であった。このため、將軍のお膝元の江戸詰め藩士と、柳生の里の国許藩士との間には自然と対立する雰囲気が生じていた。

幕末の混乱期、藩主・俊益は正式には二五〇年ぶりに柳生に戻った。この直後、尊王が攘夷で柳生の里の藩士と江戸詰め藩士が争った、いわゆる「紫ちりめん事件」で、藩主に従って柳生入りした江戸詰め藩士の多くが殺されてしまった。その中には將軍家師範としての藩主を支えた主だった柳生流の遣い手たちが含まれていた。

しかしその後も俊益は柳生の里で家業の新陰流の稽古を続けた。杉田定一『柳生六百年史』には柳生藩の家老を務めた小山田三郎助の「小山田日記」から明治三年の柳生俊益（当時二十歳）の新陰流の稽古について「この頃、毎月の行事、左のごとし」として次の記事を引用している。（以下の記事は「新陰流を哲学する 江戸柳生の心法と刀法」（神奈川歯科大学紀要、赤羽根龍夫著）を参考にした）

三ノ日 御家流奥儀稽古

二七ノ日 二時より五時まで御家流稽古

四九ノ日 二時より五時まで御家流稽古

しかし明治四年の廢藩置県で柳生藩が消滅し、俊益は東京に戻っていた。東京に戻った江戸柳生家は、もはや家業ではなくなった柳生新陰流にあまり興味を示さなくなったことは事実である。しかし幕府が崩壊するまでは柳生藩は伝統を護り続けたのである。

それでは先の引用にある「大正四年ごろから老師父（柳生殿周）」と私が時々やまと柳生村の祖廟を参詣して古蹟の保勝方法などに就いて尽心する様になった頃から、この三殿師考案の新陰流仕込杖術を師の秘伝書によって研究する様になり」という点はどうであろうか。これら発言によると江戸の柳生藩だけでなく柳生の里でも少なくとも十兵衛杖は伝えられていなかったことになる。

ここで殿周伝「十兵衛杖」のルーツを探るために、明治以降の柳生の里の新陰流について述べてみたい。

『村史 柳生の里』に次のようにある。

維新後も明治十五年（一八八二）頃までは柳生に居残っていた旧藩士、中村二角について来たり学ぶもの多く、いま芳徳寺に残存する起請文について、その地名を拾って見ると、南部、帯解、和束、高尾、坂原須川、白石、高樋、神殿、嘉幡、荒時、六条、庵治、安堵、郡山、桧垣、遠田など、また遠く播磨国や明石あたりにも及んでいる。相当多数の人達が柳生に来て、練磨の功を積んだものと思われる。しかし中村二角の奈良移住によって、姿を消してしまった。

中村二角は、慶応三年（一八六七）十二月、柳生藩主・俊益が急遽、

帰国した際に、俊益に従って柳生の里に入っており、幕末の柳生藩で銃隊の世話役を務め、維新後も柳生の里に留まって新陰流を教えていた。中村二角が奈良に移住したのは明治十六年である。

郷土史家で江戸柳生研究者の第一人者であった杉田定一の随筆『明治の柳生武士』には次のようにある。

叔父の貫二は、小藩ながら、柳生流で名高い柳生のさとに生まれたので、かつたつな、伸び伸びとした気象で、仲々の好男子であった。(中略) そのころの日本は、若さと活気にあふれ、勢いに満ちていた半面、まだ徳川時代の名残が各所にのこっており、柳生などでは旧藩士の中村二角や杉岡政房などが、柳生新陰流道場を開いて、全国から集まる青少年を指導していたし、精神面では旧藩士、岡村達が盛んに儒教の教えを説き、(中略) 青年たちの心の支柱となっていた。

柳生では、明治元年に藩主の後継者をめぐるお家騒動があったりして、有能有為の人材が、多く斃れたため、旧藩の伝統を継ぐ、これらの人たちが、いわゆる人材づくりに、余生をかけたのであろう。

貫二叔父は、こうした尚武の気風盛んな柳生のさとで成人した。岡村達に漢学を学び、中村二角に柳生新陰流の教えを乞うた。

中村二角が奈良に移転した明治十六年、杉田の叔父の貫二は一歳であるので、少年の頃に二角から新陰流を学んだとすると、十五歳として明治三十年であるので、二角はこの頃までは奈良から柳生に来て新陰流を教えたのかもしれない。中村二角の生年は不明であるが、「二、中村保身仕込杖遺様目録 口伝秘伝書」の前書に「八歳より三十二歳までに新陰流の蘊奥えんおに通じ」とあるので、三十二歳で藩主に随行して江戸から柳

生の里に来たとすると、中村二角が柳生の里に住んだ期間は三十二歳から四十八歳ごろということになる。(ただし三十二歳は二角が目録を受けた年である可能性もある。)

一方、尾張藩最後の兵法師範であった柳生厳周(四十歳)は、廃藩置県後も江戸時代から続く敷地内の道場で門弟の指導を続け、明治十八年六月に分家の柳生厳広と共に柳生の里に出かけ、柳生新陰流の祖・石舟斎宗厳が祭られている芳徳寺で奉納演武をしている。

厳長(明治二十四年生れ)の息子の延春は、この時、厳周は今後の指導を頼まれたが断ったという伝聞を伝えている。明治十八年という柳生の里で指導していた中村二角が二年前に去った後なので、代わりに厳周に柳生新陰流の指導を頼んだのかもしれない。

前述のように、中村二角は明治十六年に柳生の里を去ったが、その後も柳生の里に新陰流を教えに来たと思われる。また杉岡政房は柳生に留まって柳生流を教えたことは、次の引用で明らかである。

私も祖父が親友の杉岡政房翁に、柳生流修業の指導を頼んでくれたので、芳徳寺の本堂で、指導を受けることができた。三学(5)九箇(9)天狗抄(5)と、いわゆる「型」十九本を教えられ、あわせて試合の指導も受けた。杉岡翁、この頃七十余歳で、私は十五、六歳である。

柳生流では撃ち所はあまり制限はない。しかし勢法では小手を撃つのを、やかましく指導された、小手さえ斬れば、先方の攻撃力がなくなるし、あえて生命を絶つには当らぬという考えであろう。

杉田定一の年齢も不明であるが、大正三年に痲瘡地蔵の研究を初め、

没したのは昭和五十八年であるので、仮に二十歳で研究を始めたとする  
と、明治二十八年頃の生まれとなる。なお杉田は大正十四年八月に江戸  
の柳生家を訪れて江戸柳生文書の整理をし、二五一点に及ぶ『柳生子爵  
家古文書之目録』を作成している。

さて著者の父〔赤羽根龍夫〕が柳生の里の窪田武道具店の老主人から  
聞いた話では、芳徳寺の橋本定芳前住職は「新陰流、特に江戸柳生を習  
うのだったら神戸金七のところに行きなさい」と言っていたそうである。  
それでは神戸金七は誰に江戸柳生流を習ったのであろうか。なお神戸の  
生年は明治二十七年である。

父は巖周伝を習う前は巖周の高弟で「明治年間の印可受得者中最高の  
地位の人」といわれた下条小三郎の弟子・大坪指方の伝える新陰流を鶴  
山晃瑞に習っていた。鶴山は、「下条伝は江戸柳生」と言っており、だ  
れが下条に江戸柳生を教えたか研究してほしいと父に依頼した。鶴山の  
死後、父が大坪指方の御子息に会い、その質問をすると、それは巖周先  
生ですと明言された。ただ大坪指方は「心法は江戸柳生、刀法は尾張柳  
生」が中心と言っただけで、下条伝の技を江戸柳生であると言ったこと  
は一度もないと言ったそうである。大坪伝を江戸柳生ということは誤り  
ということになる。

その頃は既に、父と著者は名古屋春風館道場に通っており、道場に巖  
周から習った江戸柳生の技が神戸金七により伝えられていることを知っ  
ていた。そこで今度は、尾張柳生宗家である巖周が江戸柳生の技を誰に  
習ったのかという疑問が生まれた。

しかし神戸の『月の抄と尾張柳生』には江戸遣いと尾張遣いの比較が  
詳細になされており、これは長岡房成の『刀法録』が元になっている。  
そこで『刀法録』を解説していく過程で、『刀法録』には江戸柳生の記

事も多くあることを知った。同時に春風館道場に伝えられた宮本武蔵の  
円明流の調査・研究を続けたが、『刀法録』には武蔵に関する記述も多  
くあり、また尾張柳生では円明流が稽古されていたことも明らかになっ  
た。こうして江戸柳生も尾張柳生の中で伝えられていたに違いないとい  
う確信を持つに至った次第である。尾張柳生が、古伝に近い遣い方をす  
る江戸柳生の技を知っているのは当然と言える。

ただ十兵衛杖も尾張柳生に伝わったものであるとは、軽々にはいえな  
い事情がある。先に引用した巖長の『日本純正兵法ト柳生流』によると、  
大正四年頃から巖周・巖長親子は江戸柳生では「幕末僅かに一、二手を  
伝えるに過ぎなかった」十兵衛杖を「師の秘伝書によって研究する様  
になり、我れ等はこの頃から全部の正伝を明らかにすることが出来」たと  
言っている。幕末期に江戸詰め柳生武士の間で十兵衛杖が失伝してい  
たことはありえないとしても、大正四年の柳生の里には十兵衛杖が失伝  
していた可能性はなくはない。特に初期の江戸柳生の研究家であり、尾  
張柳生とも親交のあった杉田定一が「柳生巖長の創案に杖術がある。三  
尺八寸五分の仕込杖で、昔、柳生十兵衛が『御杖』として遺したものか  
ら考案したものである」（『いろは柳生物語』）と書いているとなると、  
なおさらである。やはり巖周と巖長が「十兵衛杖目録」から復元したの  
であろうか。

これらの点を考察する上で非常に重要な文献が名古屋春風館道場に保  
存されていた。神戸金七は柳生巖周に深く信頼されて、尾張柳生家に遺  
された文書のことごとくを書き写すことが許されている。それらは全て  
春風館道場に保管されているが、なかには神戸自身が集めたものがある  
かもしれない。その神戸文書の中に『柳生新陰流勢法考 天』がある。  
これは明らかに江戸柳生の文献を集めたものである。

目次は次のようになっていた。

### 御状目録

一、仕込杖遺様目録〔十兵衛杖〕

一速 死 一大乱 一 小手しばり 一 三拍子 一 高乱

二、中村保身仕込杖遺様目録 口伝秘伝書

中村氏保身杖遺様目録

三学 九箇 天狗抄

保身杖拵様

奥三本

二具足 打物 二人懸

三、三学円太刀 児玉翁聞書 児玉与一、天由

〔内容は柳生宗在の門弟、佐野嘉内の『新秘抄』とほとんど同

文である。

四、江戸柳生新陰流児玉翁聞

新陰流地 初心稽古心得物語聞書

「四、江戸柳生新陰流児玉翁聞書」は、初心者が柳生新陰流の稽古をどのようにしていたのかを知るために非常に興味深い文献であり現在研究中であり、いずれ機会を見て発表したい。

本書に翻刻して取り上げるのは「一、仕込杖遺様目録」と「二、中村保身仕込杖遺様目録 口伝秘伝書」である。

「一、仕込杖遺様目録」は、十兵衛杖であり、寛政七年十月十二日、莊田團之進が書き写したものを、さらに天保十年初夏に牧勝恭が書き写したものである。ただこれには神戸文庫とは別の写しがあり、若干文章が

異なるので、その部分は□内に示しておいた。

また春風館には別に一部、「杖術 十兵衛三厳伝」と表題された神戸自筆の文書がある。これは冒頭に「杖拵え様の事」があり、次に「杖の造り方」、最後は「仕込杖遺様目録」となっている。内容は次の通りである。

### 杖術 十兵衛三厳伝

一、杖拵え様の事

二、杖の造り方

三、仕込杖遺様目録〔十兵衛杖〕

この「一、杖拵え様の事」は「中村保身仕込杖遺様目録 口伝秘伝書」の中にある「保身杖拵様」をやや簡略にしているが、ほとんど同じ文章である。

「三、仕込杖遺様目録〔十兵衛杖〕」は『柳生新陰流勢法考 天』の「御杖目録」の「仕込杖遺様目録〔十兵衛杖〕」と同じものであるが、ただ五つの勢法の、最後の「高乱」を除いたものに、碎きと思われる遣い方が追加されている。本書ではこれらも一段下げて加えておいた。

「中村保身仕込杖遺様目録 口伝秘伝書」は「八歳より三十二歳まで新陰流の蘊奥に通じ」(序) た中村二角が、廢刀令で帯刀することを禁じられた武士のために、柳生新陰流の勢法を刀ではなく杖で遣えるように工夫したものである。

八歳から江戸の柳生道場で稽古を始め、三十二歳で新陰流の奥義に達した二角は、藩主に随行して柳生の里にやって来て、そのまま柳生の里に留まった。二角は明治になっても全国から集まる修行者に新陰流を教

えたが、四年の磨刀令を契機として、新陰流の太刀勢法を、携帯を許されなくなった刀の代わりに、杖での遣い方に替えたのであろう。江戸で新陰流の奥義に達していた二角は、十兵衛杖も身につけていたと思われ、磨刀令以降は、門人に十兵衛杖も教えたに違いない。

そうすると「十兵衛杖」のルーツに関して三つの可能性がある。なお春風館に十兵衛杖を伝えた神戸金七は、十兵衛杖は厳周から習ったと言っている。

一、尾張柳生の中に「十兵衛杖」も伝えられており、それを厳周が神戸に伝えた。

二、江戸柳生では失伝していたものを大正四年以降、厳周と厳長が「伝書」から復元した。

三、中村二角が柳生の里で伝え、二角から相伝を受けた誰かから厳周が習った。

以上のどれが真実であるか、今のところ不明であるが、神戸文書の全貌が明らかになるに従って真実の姿が見えてくるに違いない。

著者たちは、神戸文書を解明していくことを一つの使命としているが、もう一つの課題は春風館に神戸が伝えた勢法を習練して、それをそのまま伝えることである。現在、一応の勢法を覚え、著書として文章化し、ビデオで映像化した。しかし稽古をするほど奥が深くなっていく。これからも「朝鍛夕鍊」の稽古を通じて少しでもその真実の姿に迫りたいと努力している。その際、心がけていることは、伝書の解説や自己の判断で、神戸によって伝えられた勢法を少しも変えないことである。これからの日本人のあるべき姿を模索するためにも、近代ヨーロッパから

輸入された身体操作に影響されていない江戸時代の身体操作をそのまま伝えることが私たちの課題である。

ただ関東支部では二角杖の、伝書による復元を試みている。これは明治になって書かれたものであるので、文章が比較的容易で、そのまま作為を加えず新陰流の刀法によって復元することが出来る部分が多くある。これは厳周伝を厳格に護っている我々のいわゆる「遊び」の部分であり、これを以て中村二角の遣い方であるとすることは厳に戒めなければならぬ。

一、『仕込杖遣様目録』〔十兵衛杖〕

速死

打太刀 太刀を大きく振り上げて使太刀の中墨を上より強く打ちかけ  
る。

使太刀 その下へ左足を踏み入れ、打太刀の打ち下す太刀を、杖の中頃  
を左の手にて受け留めて、そのまま打太刀の右の方へ外しかけ  
て、左の肘を延ばし、打太刀の中墨〔を〕外さぬように、顔に  
ても咽のどにても首にても胸にても突くなり。  
とかく中墨を外さぬように心得べし。

使太刀 はじめ杖を右手につき、進み出る。

打太刀 下段にて進み、水月にいたり真つ向に打ちきたる。

大乱

打太刀 振り上げて打つ。

使太刀 その打つ所を打太刀の右の方へ外しかけ、その打太刀〔の太刀〕  
を受け流して、打太刀の右腕首を打つ。

打太刀 打たれて一足、引く。

使太刀 その所を左の膝を折り敷き、横に打太刀の左の足を打つ。

打太刀 右の足を開き、振り上げたる太刀を打ち下ろす。

使太刀 その所を速死一本の打ち留めの如く受け留め、打太刀の右の方  
の手首の根〔他書は「首の根」を打つなり。

使太刀 杖を左手につき、出づ。

打太刀 頭に〔打ち〕きたる。

使太刀 順に受け流して逆に腕首を打つ。

打太刀 引き上げる。

使太刀 〔その〕先を越しかけ、肩より順に打太刀の足を、折り敷き  
ながら打つ。

打太刀 やや右足を右に開く心持ちを以て頭を打つ。

使太刀 足を立て替え、速死一本の如く受け止め手首を打ち、あるい  
は押し落し突くものとす。

小手しばり

初手は速死一本の如くおりの拳をとめるかしらを

〔この最初の文章は、打太刀、使太刀、何れの動作か不明である。他  
書は「初めは速死一本の如く下る右拳を留める。留めるかしらを」

打太刀 杖の先を左の手にて取る。

使太刀 取られて左の手を離す。

打太刀 上へ打ちきたる。〔他書は「右手上段に打込み来たる」

使太刀 その杖にてはじき上げる様にして打太刀の右の袖の下より後ろ  
へ廻りて入り込み、そのまま打太刀の右の手首を取る〔他書は  
「取りて締る」なり。

使太刀 杖を右手に提げて出る。

打太刀 上より首へ打ち来たる。

使太刀 杖を上げて受けんとす。左手逆に持ち、打太刀の太刀を防が  
んとする。

打太刀 杖の先を左手に持ち、右片手にて首を打つ。

使太刀 左の手を離し、杖にてはじき上げる様にして打太刀の右の袖

の下より後ろへ廻り入り込み、打太刀の手首を取り、杖にて打太刀の脇に当て、前にひき落し、折り敷き、打太刀の太刀をもぎ取り、逆に打太刀の腕を足にてふみ捕る。

### 三拍子

使太刀 一刀兩段の構えの如くに、左の肩を見せて構えるなり。

打太刀 その肩先へ切り懸かる。

使太刀 その切り懸ける太刀を下より一刀兩段の如く打ち合う。

打太刀 また右の足を後へ引き、身を替えて、太刀を振り上げる。

使太刀 その処を右の足を踏み入れ、打太刀のアバラ外れを突く。

打太刀 突かれてまた身を替えて上より打つ。

使太刀 その所を足を立て替え、左の手にて杖の中頃を持ち、受け納むるなり。

使太刀 一刀兩段の構えの如く左足下段、車の構えになし待つ。

打太刀 来たりて肩先へ切りかかる。

使太刀 そのままの身なりにて順に打太刀の拳を十文字と打つ。

打太刀 右足を大いに後へ引き、太刀を振り上げる。

使太刀 振り上げる所を右足を踏み込み、打太刀のアバラ外れを突く。

打太刀 突かれて身を替えて上より打つ。

使太刀 杖の中頃を取り受けおさむるなり。

### 高乱

打太刀 太刀をかしら（頭）の上に差し上げて、中墨を打ちかくる。

使太刀 右の手にて杖の端はしを持ち、「他書は「左の手にて杖の中頃を持ち」が入る」上より打たば、受ける心持をもって帯の通りにさげかかるなり（他書は「首の通りにさしかかるなり」）。

打太刀 その所を上は打たずして左の膝を折り敷いて使太刀の左の足を横に打つ。

使太刀 その所を右の足を開き、当たらざる様にて張る。

打太刀 太刀を張られてまた打つ。

使太刀 打つ内に打太刀の左の方へ廻りかけて右の足を踏み込み、左の足を開き、打太刀の手首の根を（他書は「拳にても首にても」）打つなり。

右、張る事、随分さえて張るべし。張って打つまでゆとりなき様に遣うこと專一なり。

右五ヶ条をよく鍛錬して味を知らば、初の一本にて心持こもれりと知るべし。

右杖は

柳生十兵衛様御工夫にて殊の外御秘藏の事ゆえ外に知る者これなし。

柳生十兵衛尉菅原三嚴

寛政七乙卯年拾月拾弍日

莊田團之進

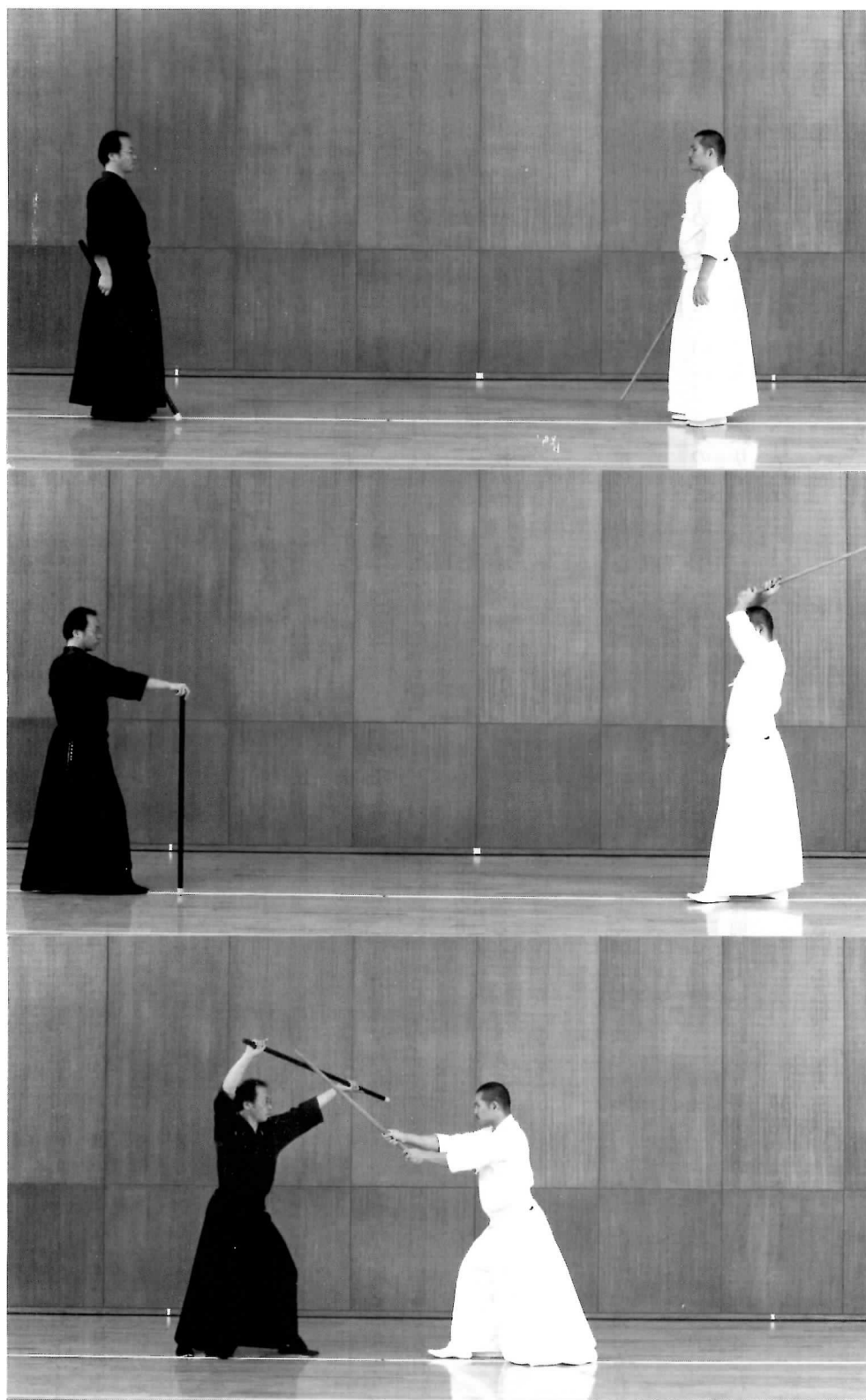
藤原常芳 花押

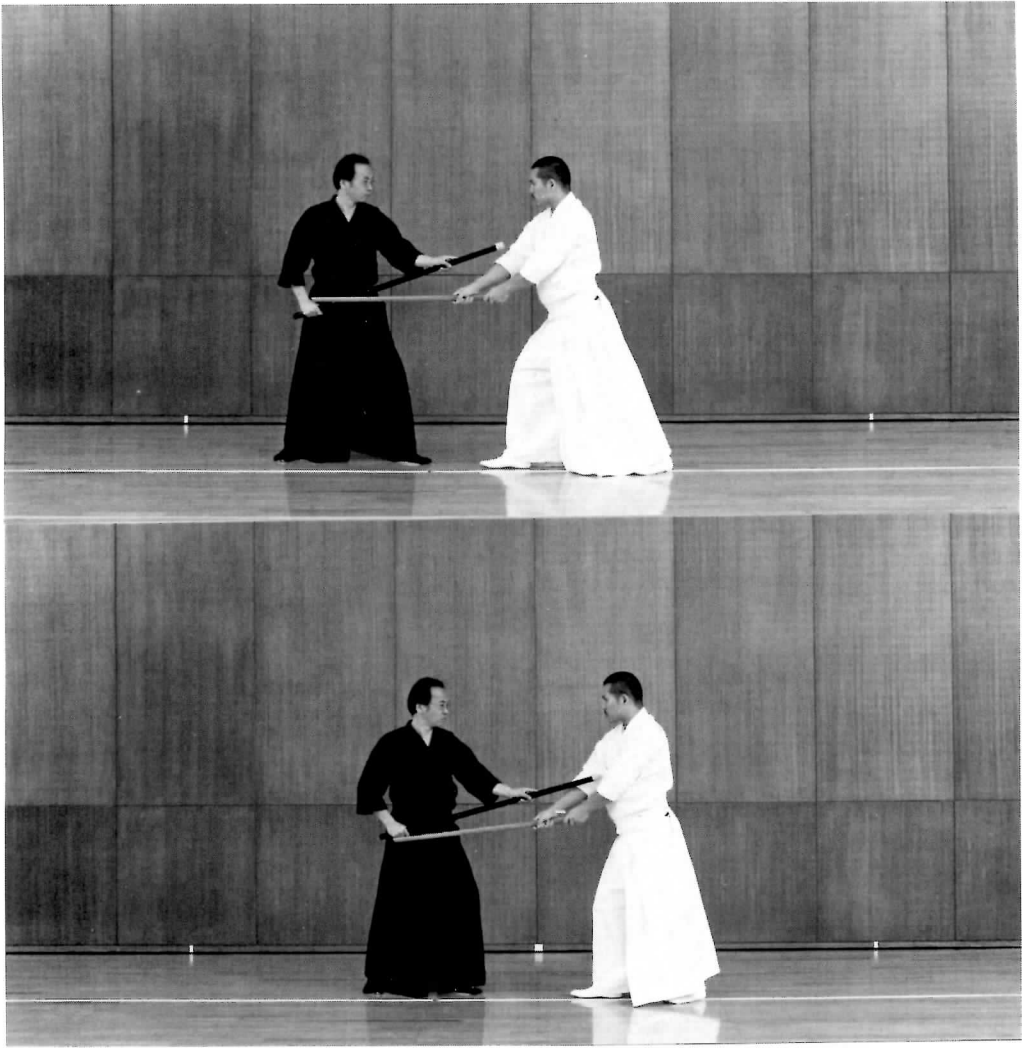
千時天保十己亥年初夏燈下之を書く

牧 勝恭 花押



二、「十兵衛杖」演武〔春風館の遣い方〕  
速死一本（一本目）



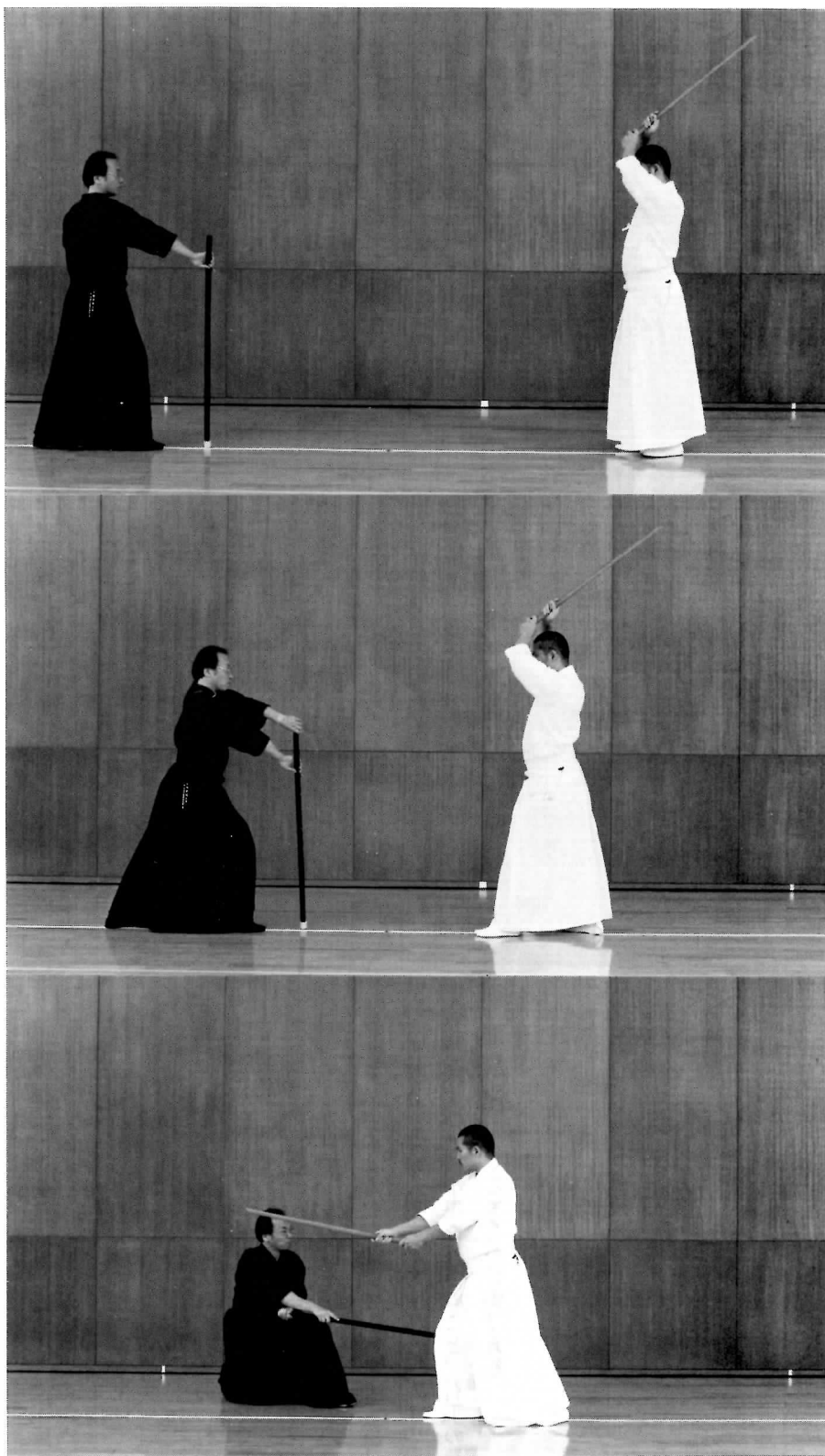


速死一本（一本目）

使・はじめ杖を右手につき、進み出る。

打・水月に至り、太刀を大きく振り上げて、使太刀の頭を上より強く打ちかかる。

使・その下へ左足を踏み入れ、打太刀の打ち下す太刀を、杖の中頃を左の手に持って受け止め（杖は左下がり）、そのまま打太刀の右の方へ外しかけて、左の肘を延ばし、打太刀の中墨を外さぬように、顔にても喉にても胸にても突き、半歩、勝ち詰め、残心。左手の肘を伸ばすこと、中墨を外さぬこと、右手の拳が腰の位置にくることが肝要である。



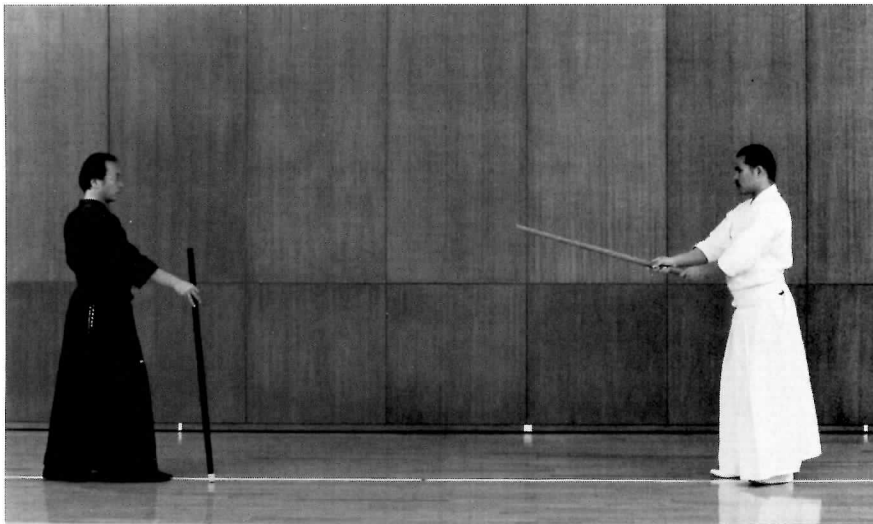
大乱（二本目）  
使・右手を逆にして（親指が下）杖を持つ。

打・水月に至り太刀を大きく振り上げて、  
使太刀の頭を上より強く打ちかかる。

使・左手で杖の先端を逆に持ち、右手を返し杖  
を大きく廻しながら打太刀の右に轉身して  
打ちを外し、右足を折り敷いて打太刀の膝  
の裏を打つ。

打・使太刀の頭を打っていく。  
使・折り敷いたまま一本目の如く受け留め、  
使・立ちあがりながら中墨を突く。

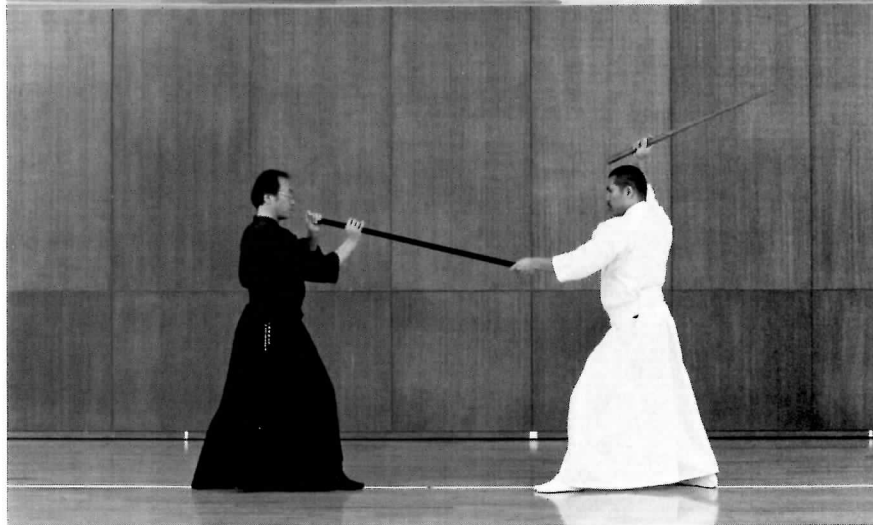




小手縛り（三本目）  
使・右手に状をついて歩み行く。



打・水月に至り、太刀を大きく振り上げて、使太刀の頭を上より強く打ちかからんとする。  
使・左手で杖の頭を手前に引いて、杖の先を打太刀の顔の前に付ける。



打・思わず杖の先を左の手にて取り、右片手上段から使太刀の左側頭を打っていく。



使・打太刀の右斜め前に身を入れながら  
右手を左手前に突き上げるようにし  
て打ちを外し、

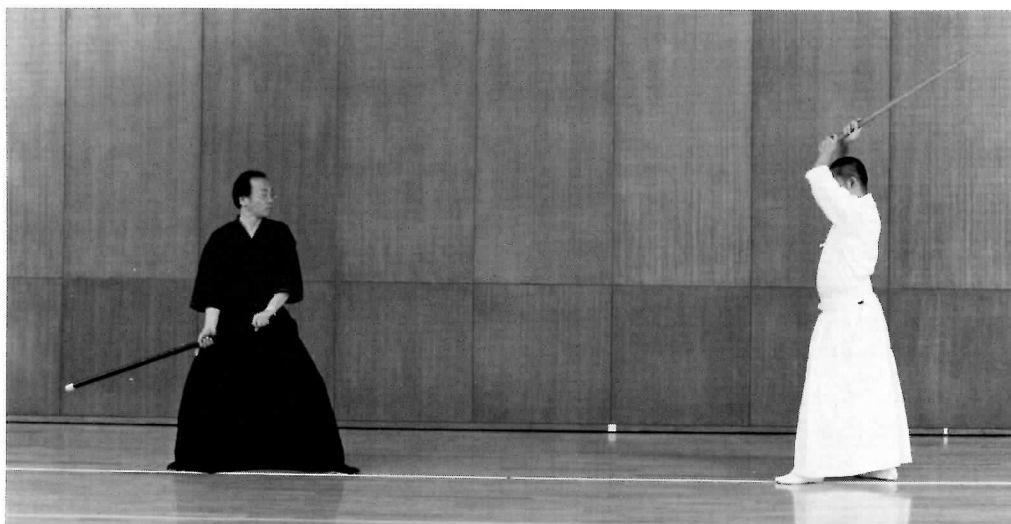


使・左手で打太刀の右手首を持って打太刀  
の右後ろ脇へ体を転じながら、右手を  
回して打太刀をうつ伏せに押し倒す。





三拍子（四本目）  
使・車に構え左の肩を見せる。



打・その肩先へ切りかける。  
使・杖を大きく右肩上で廻し「斬釘截鉄」  
打ちで右膝通りに打太刀の右腕を打つ。



高乱（五本目）  
使・杖を右手に提げる。  
打・使太刀の左膝を打っていく。





使・左の手にて杖の中頃を持ち、右手で杖の橋を持ち、左手前に杖を突き下ろして打太刀の打ちを受ける。



打・太刀を上段に構えながら下がる。使・そのところを杖を右肩上に取り上げ、右足を踏み込んで左腕を打つ。





### 三、中村氏保身杖遣い様目録

明治十六根秋九月上院 四代目 中村二角

○〔前文〕および欄外に書かれた口伝と思われる説明文、「天狗抄」五本の次の「奥三本」は除いた」

#### 一刀兩段

使太刀 下段にて脇構え、待つ。

打太刀 これを見て急に飛び掛かり、使太刀の左の肩を打つ。

使太刀 それに従い右の足を踏み込み左の足を後へ引き、車はまわる理を以て、杖を巻き掛けて、打太刀の腕首を打ち、飛びのく。是一本。

#### 斬釘截鉄

使太刀 杖を左手に提げ、そろそろと出る。

打太刀 これを見て、使太刀の右の肩を目掛けて急に打ち掛かる。

使太刀 これをよく見すまし右の足を前へ出し、左の足を後へ引き、杖にて請け留め、打太刀の右の方へさけ、杖を巻き掛け打太刀の腕首を打つて飛びのくなり。是一本。

#### 半開半向

使太刀 左の手にて杖を持ち、そろそろと出る。

打太刀 これを見掛けて使太刀の杖を持ちたる腕を横に切る。

使太刀 杖にてチヨと打太刀の太刀をおさえ、すぐに右足を右へ開き左の足を後へ引き、敵の腕首〔を〕打つ。是一本。

#### 右旋左転

使太刀 右の足を前へ出し、左の足を後へ引き、手もじり構え待つ。

打太刀 この構えを見て、使太刀の右の肩を切る。

使太刀 すぐに車の太刀にて身を立て替え打太刀の腕首を打つ。是一本。

#### 長短一味

互いに右旋左転の場を去らず、

使太刀 一刀兩段の構えにて待つ。

打太刀 これを見て、一足、後へ引き、太刀を振り上げ、右足を踏み込み、使太刀の頭を打たんとする。

使太刀 その処を足を入れかえ打太刀のあばらを払い、すぐに杖を反し待つ。

打太刀 益々怒り、使太刀の頭を打つ。

使太刀 杖〔の〕中頃にて請け留め、打太刀の右の方へさけて打ち、飛びなくなり。是一本。

奥には九ヶ条、天狗抄、色々おもしろき遣い様もこれありといえども、別に心持ち替わらざる事にて、敵、色々仕掛けて打つとも、おおかたは、この五ヶ条にかぎる。能々心持ち肝要なり。

右五ヶ条、先免とし、この五箇にて半年ほど修行いたさせ、上達見ただし、その上、九箇の遣い方免すこと。

## 九箇

### 必勝

使太刀 杖を腰にかかえ、そろそろと出る。

打太刀 急に掛かりて、かみ(上)より打太刀の頭を打つ。

使太刀 打太刀より打つ太刀を能々見すまし、腰にかかえる杖を右の手、片手にて杖を逆に廻わし受け留め、受ける時は、左の手、持ちそえ受け〔る。受け〕る時は打太刀の右へまわりて杖をまきかけて、打太刀の腕首を打つ。是一本。〔文章に混乱がある〕

### 逆風

打太刀 中段の青岸に構えて待つ。

使太刀 杖を右の肩にかたげ、左の肩を敵の拳にくらべ、序の心を持つて出て、右の足を打太刀の左へ開き、打太刀の三寸、左の拳を掛け横になぐりて、すぐに左車に構え待つ。

打太刀 なぐられ一足引き、また使太刀の右の肩を打つ。

使太刀 すぐに飛び違い、打太刀の右腕首を打つ。是一本。

### 十太刀

使太刀 一刀両段の構えにて左の搦を見せ、待つ。

打太刀 これを見て、その搦を打たんとす。

使太刀 左手をすかして下より杖を横にて打太刀の太刀中をはらい、この時、使太刀は打太刀の右の方へ飛び違い、左の足をつき右の足をたてくわつして〔合つして〕か〕杖をかえして左手持ちそえ、打太刀のあばらを打つ。是一本。

### 和卜

打太刀 青眼の中段にて構え、待つ。

使太刀 右の手に杖を持ち、すらすらと出で、打太刀の三寸へ色を仕掛け、左足は前、右足を後におき、さげ待つ。

打太刀 使太刀の頭へ打ち込む。

使太刀 能々見て、打太刀、かみよりふり上げ頭を打たんとする処を、杖を左の手にて中ほど持ちそえ、打太刀の両手〔の〕あいだを受け上げ、打太刀の顔を杖にて突くなり。是一本。

### 捷徑

打太刀 上段の右構えにて待つ。

使太刀 左手に杖を提げ、すらすらと出る。

打太刀 これを見て、中筋通りに打ちおろす。

使太刀 右足を踏み込み、右の手を、杖を持ちそえ受け留め、すぐに打太刀の左へまわり顔を突くなり。是一本。

### 小詰

打太刀 下段の青眼に構える。

使太刀 打太刀の右方へ斜にて進み見れども、打太刀ださす〔出さず〕か〕故に、また真向きにそろそろと進む。

打太刀 これを見て、使太刀の進む右足を、たい〔体〕を崩さず、そのまま切る。

使太刀 すぐに右の足あとへ引き、左の足を前〔に〕おき、杖を立て受け留め、巻きかして打太刀の腕首を打つ。この時、巻きかける時は、足を入れ替え、打太刀の左方へさかけて打つ。是一本。

大詰

打太刀 一文字の中段にて一拍子にて使太刀の左の肩を切る。

使太刀 杖を右手にて持ち、打太刀の掛かるを能々見て、左手を持ち添え受け流しに左巻かけて、打太刀の左へまわりて左拳を打つ。

打太刀 打たれて継ぎ足にて使太刀の眼のあたりを突く。

使太刀 後へ飛びさり、杖を上へとって引いて、突く太刀を杖にてはらい落すなり。是一本。

八重垣

使太刀 杖を横に持ち、手をもじりて待つ。

打太刀 これを見て左巻かけにて使太刀の肩を切る。

使太刀 能々みすまし、体はそのままにて受け留め、杖を左巻かけにて、右足を打太刀の左の方へ踏み込み、左足を後へ引き、打太刀の腕首を打つ。是一本。

村雲

打太刀 一文字の中段にて太刀をあげ打たんとす。

使太刀 下段の左構えにて杖をしごき、これをもじり、ちどりにふんで敵の右のあばらを又きんへそ〔金・臍か〕あまわり〔意味不明〕を突かんとすれども、

打太刀 これ見て中段にて序を切る。

使太刀 切る故にせんかたなく杖の先を地に付け、左構えにて待つ。

打太刀 これを見て、使太刀の頭を見かけて上より打つ。

使太刀 それに従い、杖をかえし受け留め、左足を打太刀〔の〕右の方へ踏み込み、右足後へなして打太刀の腕首を打つ。これ一本。

この遣い様は村雲の序を踏む。口伝は多し。杖の内にては難しき遣い方なり。能々心得、肝要なり。

以上、九箇、中杖終

これより奥免、誓紙血判にて差免の事

天狗抄

花車

使太刀 立ち八字〔意味不明〕にて杖を両手に持ちまきつたてに〔意味不明〕杖を立て、脇構えにて待つ。

打太刀 これを見て、使太刀の左の肩を上より打つ。

使太刀 それに従い、左の足を少し前へ出し、右足をあとへ引き、打太刀の拳を打ち、そのまま手を高く上げ見せて、後へ後へ飛びのくなり。

打太刀 すかさず使太刀の拳を切らんと詰め来る。

使太刀 へたりと打太刀の右へさけながら、くわつして打太刀の向うつねを片手にて打ち、すぐに杖をかえして打太刀のあばらをつくなり。是一本。

明身

使太刀 杖を右手に提げ、すらすらと出る。

打太刀 これを見て、使太刀〔の〕左手越しかけて横に打つ。

使太刀 杖を左手を持ちそえ、〔打太刀の太刀を〕受けながして左巻きにて打太刀の左へ廻わり、腕首を打つて飛びのくなり。是一本。

善待

使太刀 杖を左手に提げ、出る。

打太刀 杖を提げたる手を切り落さんと横に切る。

使太刀 右の手を杖を持ち添え、左足あとへ引き、打太刀の太刀先を杖にて少し横にうけ、すぐに打太刀の柄中、杖の先に押さえ、打太刀のきんへそ〔金的・臍か〕のあたりを突くなり。是一本。

手引

使太刀 場を深く取り越す故に、あとへ飛びのいて、くつわして〔意味不明〕待つ。

打太刀 すかさずつけ込みて、使太刀の真向きへ打って掛かる。

使太刀 杖をかえし、くつわしながら受け留め、打太刀の右の方へさけて首を打つなり。是一本。

乱剣

打太刀 少しもゆとりなく一拍子にて太刀を巻掛け打ち来たる。

使太刀 杖を右手に提げ、一重身に構え、左手を持ちそえ、打太刀巻きかけあたる処を下より杖にてはね上げ、敵の左へ飛びのき、すぐに片手、杖にて敵のこむらを、くわして打って飛びのくなり。是一本。

天狗抄 終

右遣い様は心苦 〔一字不明〕苦にての工夫なれば、世に遣い方こ

れなき故、大切の遣い方なれば、他見仕り間敷き事。

中村四代目二角、遣い様工夫に付き、子孫末々至るまでこの遣い様、相続すべく様、口伝切りくみ相認め置くものなり。能々稽古致すべき事。

保身杖拵え様、左に

一、スタリと申す鉄〔南蛮鉄を〕神戸本、鍛冶に能々鍛えさせ、巾三分・厚み一分にして、三本鍛えさせ、長さ四尺定法なれども、それ我がたけ丈〔その人の身長〕にほうして〔合わせ〕為すべく事。四尺以上も悪しき。我が杖につきて、よきごろに尺打たせ〔す〕べき事。

右鉄、俗に云う、則ちナンバン鉄と申す事に候。この鍛え〔たる〕鉄、角三角に合わせ、その間へ竹を入れ、膠を付け、合わせるなり。その上、麻苧にて固く巻き、あき□〔一字不明〕〔隙間なきよう〕神戸本〕巻きかため、その上にしぶ〔渋〕を二三べんもつけ、乾かすべし。その上、能きごろに麻苧にて固くひねり、千段巻にて巻き、また渋にて能々かため、その上漆を掛けて用いるなり。

色はその人々に有り〔好みにまかす〕神戸本〕、定法は黒か青質の色にて候。右色は目立たずして宜敷なり。

一、竹は孟宗竹にて相用い、〔用うる事〕神戸本〕

右、保身仕込み杖、師は南都高畑町丹坂伊予、杖師にて候事。

右、保身仕込み杖、他国他村にはこれ無きに付き、大切の杖にて、仕たて様、他見他言仕り間敷く候事。

「杖の造り方」〔神戸文書〕

三嚴みつよし〔柳生十兵衛〕師は当時、奈良の神職・二坂伊予に依頼して独特なる杖を造る。それはみかん蜜柑わり割に鍛えたる鉄鋼三本と、同じく蜜柑割りになしたる孟宗竹三本を交互に合わせ、その上を苧でグルグル巻きに結束し、楮こぎの半紙を以て渋張りにし、なおその上を半紙のコヨリで千段巻にして、その上を漆塗りにしたものである。

〔注〕

柳生嚴長『日本純正兵法ト柳生流』に次の記事がある。

「古来、柳生藩では一般にこれを御杖と敬称して、藩主の代替わりの節は必ず一本宛調製し、これに依って二阪家は年々柳生家から三人扶持の給与を受けていた。」